展示スペースだけでなく、
建物自体が木材展示場になっている

玄関

六月にオープンしたばかりの、木材展示場、木彩館(仮称)を訪れた。玄関に入ると今まで嗅いだことのない、強い香りが漂って来る。それもそのはず、そこには、屋久杉、ケヤキ、楢、楠、ラオスヒノキなどの高級材が使われていて、それらが調合された香のように香っていたのである。

木彩館は、鉄骨以外すべて木材で建てられていると言っていい。壁、天井、建具、床、ダイニングキッチン、サッシなど、実に百種類以上の木材が使われている。展示スペースだけでなく、建物自体が木材展示場になっているのだ。

どうして百種類以上の材を集めた展示場(木彩館)を造ろうと思い立たれたのであろうか。木材の専門家、常務の高田豊彦さんに聞いてみた。

「建具や家具製造業や設計士など、業者の方々により一層適切な材を使っていただきたいとの思いがありました。」

建築、木工業界で非常に木材に詳しいと言われている方でも、実際には五十種類知っているかどうかのレベル。まして、百種類の、それぞれに木材の特性に適した、使用箇所、使用方法、長所、短所などになると、把握している人は、皆無と言って良い。

「必ずしも正しいといえない木材の使用を見かけることも結構あります。」という。

木彩館を訪れれば、百種類の材の質感、イメージを直感的につかめる。外壁には雨に強い腐食しにくい材が使われていて、他に、強度のある建築材、健康に寄与する材、住空間の快適さを増す材、それに内壁面に使われていて、ユニークな杢目を持っている、〝タモ〟、またテーブルに使われて

～五感を使って木材に触れて いただきたいと思っています～

㈲高田製材所
常務取締役　高田　豊彦さん

いる玉杢とちぢみ杢のある、〝ブビンガ〟など、一見の価値がある。高田さんは、「業界の方、一般の方にも門戸を開放しています。忌憚なく訪問し、五感を使って木材に触れていただきたいと思っています。もちろん丁寧に案内説明をさせていただきます。」

「大川がもっと元気になってほしい。」これは、子供の頃から大川に育った高田さんの願いである。それは木彩館（もくさいかん）を企画したことにも関係がある。どういう事だろうか。

「大川は、様々な木材、合板、ツキ板など、木材集積地といえる地域です。しかも伝統に裏打ちされた、優れた加工技術があります。これだけの産地は、全国でも大川だけではないでしょうか。ただ様々な製品を製造する過程で、どんな素晴らしい技術を操っても、最初の素材選びが十分でないと、最終的にグレードの高い製品は造れないと思っています。最初の出発点が間違ってしまうと、ゴール箇所も間違ってしまうと思うのです。自分自身はたいしたことはできませんが、得意分野で一生懸命取り組むことで、事業だけでなく、大川の発展の一助になればいいな、と思っています。」

■　■　■

読者の皆さんも「木彩館（もくさいかん）」を一度訪れてみてはいかがでしょうか。